ハイテムが中国・天津市に自社工場

農場ニーズに応える直立ベルトケージ販売

㈱ハイテム（安田勝彦社長―本社・岐阜県各務原市テクノプラザ二―一〇）は七月九日、国際養鶏養豚総合展が開かれた名古屋市のポートメッセなごや交流センター会議室で記者会見し、レイヤー（採卵鶏）用の直立ベルトケージシステムの自社製造を始めると発表した。

同社は、一九七二年の創業から一貫して、日本の養鶏現場に密着した養鶏設備の提供を目指してきた。ヨーロッパで生まれ、鶏糞処理が円滑で、土地使用効率の高い直立ベルトケージシステムに取り組んだのは二十三年前であるが、同システムを日本に定着させるために、ヨーロッパより厳しい日本の条件、例えば破卵の減少や日本の気象環境に合った換気の改善などが求められたため、独自の研究開発を進めて改善を図り、ハイテムサルメット直立ケージシステムとして高い評価を得てきた。

このような背景の中で今回、さらに性能を高めた直立ベルトケージシステムを供給するため、中国天津市の北辰ハイテクパークに自社製造会社のスターハイテム（正式名称「星海泰設備製造（天津）有限公司」）を設立、八月から本格的に稼働させ、自社製造のハイテム直立ベルトケージシステムを販売することにしたもの。これに伴いドイツのサルメット社との提携関係は終了するが、これまでに納入したハイテムサルメット直立ケージのアフターサービスとスペアパーツの供給は、これまで通り同社が責任を持って対応することにしている。

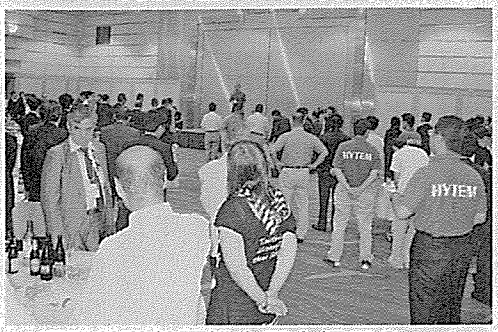
安田社長は、スターハイテムの設立について、「日本のレイヤー農場設備の高度化の流れの中、現場のきめ細かいニーズに積極的に対応すると同時に、耐震性能の向上、性能・品質・コスト力を備えた高性能専用工場との提携関係は今後とも堅持する。

安田社長は今後の抱負について、「ハイテムは、トリの分かる機械・電気プロの技術会社として、今後も毎年、工学部卒の人材を確保して研究・開発部門を強化・拡充し、養鶏現場の声を新技術に活かしていく。自社製造体制の確立によって、国際化の波に生き残れる日本のレイヤー農場の設備ニーズに対応し、一層身近に役立てる会社を目指していきたい」と述べた。

展示会場でパーティー開催

㈱ハイテムは九日、国際養鶏養豚総合展が開かれていた名古屋市のポートメッセなごや交流センターで、午後五時から展示会を訪れた生産者や取引先などを交えて懇親パーティーを開いた。安田社長が直立ベルトケージシステムの自社製造を始めた経緯を報告するとともに、同社の役員や部長などを紹介、なごやかに歓談した。

記者会見するハイテムの安田社長（中央）



国際養鶏養豚総合展会場でのハイテムのなごやかな懇親パーティー

最高経営責任者（CEO）の薫事長に安田勝彦ハイテム社長、取締役に当たる薫事に林振陀氏と椿井康司ハイテム常務取締役、総経理に虎氾軍氏。設備の製造については、すべてハイテム本社工場で作成された図面に基づき、厳格な品質管理基準に沿って現地で生産・組み立て、コンテナーで日本に送られる。

日本ではなく、中国天津市の北辰ハイテクパークに工場を設立したことについて安田社長は、「現地は、トヨタをはじめ、同関連工場の進出で、日系工業インフラ（鋼鉄、機械部品調達など）が整備され、かつ中部国際空港から天津のスターハイテムまでは約三時間で行けるなど、交通アクセスが良い。また、世界最高水準の日本の技術と、現地中国の勤勉で、コスト力のある労働力の融合を図ることができることが魅力」とし、これまでに比べ品質面で五%、コスト面で一〇%のメリットが期待できる、とした。

サルメットとの提携は終了したが、ドイツのルービン社（ニップル、バーコンベア）やベルギーのロクセル社（給餌・搬送システム）など、海外や国内のトップレベルの日本型動物愛護の動きにも応える設備作りに、意欲的に対応できる体制を強化するために、自社製造会社の設立となった」と説明した。

スターハイテムの払込済資本金は八千万円で、㈱ハイテムが九〇%、残り一〇%は安田氏の個人的知己で、中国で産業用メッシュを生産している林振陀氏が出資。役員は

8月から本格稼働するハイテムの自社製造工場「スターハイテム」（中国天津市）